2023年度　関西学院高等部　学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、千里国際中等部・高等部校長からの第三者評価／学校関係者評価をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成28年改訂）で示された学校運営における12分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」、「生徒指導」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「教育環境整備」、「人権教育」を設定して実施しました。また、グローバル教育や探究型授業を含め、国際的な諸問題を含む国内外の社会的課題の解決への関心・意欲の育成のため「国際理解教育」を継続しました。また、アンケート調査に関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”についての質問を「学院共通項目」として加えました。

2023年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒1,147人・100%（前年度回収率100%）、保護者909人・79.3%（前年度回収率79.7%）、教員56人・100%（前年度回収率100%）でした。

今年度も、各項目の生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2024年3月15日
関西学院高等部
部長　枝川　豊

学校評価

教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、他者に、社会に、世界に対して仕えるため、性別、年齢、国籍など様々な違いを超えてお互いの個性、人格、多様性を認め合い、「凡ての人に仕える」、「地の塩、世の光」として、「平和な社会を築く担い手」となる関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。そして、一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

また、「探究型カリキュラム委員会」を立ち上げ、高等部教育の様々な場面で、授業や行事で、SDGs の達成を目指し、“Mastery for Service”を体現する世界市民の一員として、国内外の社会に自ら関わり貢献できる力を育成する/身につける教育を展開することを目標とする。

2023 年度の評価項目

- キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- 教育課程・学習指導：重要項目であり、生徒の「学び」が確かなものになっているか、そのためのカリキュラム編成になっているか、検証のために評価項目として設定している。
- 生徒指導：規律ある生徒の生活環境、および安心して学べる生活環境が整えられているかを検証するために評価項目として設定している。
- 教育環境整備：共学化から 9 年が経過し見直す為の課題を把握することは重要であり、快適な学習環境を保証するために評価項目として設定している。
- 人権教育：重要項目であり、グローバル社会において人権を尊重し、多様性が受容される環境が整っているかの検証のために評価項目として設定している。
- 国際理解教育：探究型活動および授業を通して生徒の国際理解を深めるため、評価項目として設定している。

2023 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践	自己評価	A
目標	建学の精神の体現		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	● 生徒のキリスト教に関する理解の向上を目的とした活動を 2023 年度も引き続き行った。その結果、生徒（問 1)「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う」で肯定的な回答を 84.7%（2022 年度 82.7%)、生徒（問 2)「礼拝の時間は大切だと思う」で 78.0%（2022 年度 76.8%)、生徒（問 3)「聖書の言葉は共感できる部分がある」で 79.2%（2022 年度 78.4%）を得た。2022 年度も評価が高かったが、2023 年度はさらに評価が上がった。これは、礼拝の司会、聖書朗読、奏楽、特別さんびなどを訓練された生徒の手で行ってきたことによるところが大きいと考える。 ● 自由出席である早朝祈祷会（火曜日 8：10）の出席状況の向上を毎年目標としているが、平均出席 248 名（2022 年度 189.1 名）と大幅に増加した。2019 年度（コロナ禍前）が平均出席 125.7 名であることを考えても大幅な増加と言える。		

	● 学校外のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）との連携・関心を高めるため、北アフリカモロッコで発生した大地震で被災された方々のための献金、能登半島で発生した大地震で被災された方々のための献金、子ども食堂でのボランティア、くるみ幼稚園でのお残り保育のお手伝い、コンタクトレンズケースのリサイクルなどの活動を行った。その結果、生徒（問 4）「高等部は、キリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている」で肯定的な回答が 72.3%（昨年 74.3%）とこれも 2022 年度同様、評価が高い。ボランティア委員会には、現在 30 名の委員がいる。 ● 保護者（問 1）「高等部が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間 ● 的成長に寄与している」の肯定的な回答の割合は 86.6%（昨年 88.3%）と多くの保護者が昨年同様強い関心を示した。保護者の方へのキリスト教理解の取組の一環として、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」を行っている。その出席者数も現状維持をしている。
今後の方策	● 2022 年度同様、多くの項目で増加という評価を受けて、「キリスト教主義教育が浸透している」ということを再認識した。創立以来、大切にしてきたことを守っていく強さが問われていると考える。 ● クリスチャン教員が減少する中で、キリスト教主義教育をさらに浸透していくためには、近隣教会の牧師に積極的に奨励を依頼することや、関西学院内のクリスチャン教職員が今以上に奨励に携わり、魂の育成に励むことが必要だと考える。

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【関西学院大学への院内推薦制度に基づく学校として、その制度を活かし、基礎的な学びの上に、主体性を重視した探究的な学びを実現するカリキュラムや、生徒が積極的に選択できる進路指導の仕組みが構築されているか】	自己評価	B
目標	● 接続する大学で主体的に学ぶ力を保証し、多様化・不安定化する社会に対応できる学びの力や姿勢を習得する。具体的には「1.基礎学力の向上」、「2. 課題を発見し、解決策を考える探究型の学びを深める」、「3.興味や関心に応じて深く学ぶ」を目標として掲げる。 ● 基礎学力が身についていない生徒には補習などきめ細やかな対応をする。 ● 的確な自己分析と、大学に関する情報収集を結びつけ、学びたいことや将来のビジョンに即した進路選択と、その実現に向けた指導を行う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ● 基礎学力向上の取組として、1 年生から 3 年生までの継続的なサポート体制ができ、未修得単位の回復と基礎学力向上に努めた。 ● 主体的な学び・探究型の学びについては、WWL コンソーシアム構築支援事業（以下 WWLC）の経験を活かした探究科目に「AI 活用」、「ハンズオンラーニング」、「グローバルスタディ」に加え、2023 年度から 2 つ「サイエンス探究」、「アート思考」を追加し、より多くの生徒を受け入れられるようにした。また、担当教員間で生徒の主体的な学びの過程(知識獲得・課題発見・考察・議論・実践・発表など)や教員による評価の仕組みについての実践と蓄積を重ねた。また、1 年生の終盤から 2 年生にかけて、2 年生全員が「地元地域の活性化」をテーマに立案する地域探究プログラムを実施した。 ● 探究型の学びの発展のため、「中高生探究の集い」を 2022 年度に続いて 12 月に主催した(Classi 社共催)。コンテスト部門のプレゼンテーションとオープ		

ン部門のポスター発表をあわせ、全国各地から 39 校・約 300 名の参加があった。

- 高等部での学びの核として位置づける 3 年生選択授業において、外部人材を活用して、アントレプレナーシップ講座やアート探究、写真演習、舞台表現、会計学などの新たな講座を開講した。
- 自己分析ツール(Ai-GROW)や、進路情報の収集・整理、自己分析との関連付けを意図したワークブック(マイナビ社)など、外部サービスを活用して 3 年間を通して進路の意識を積み上げるプログラムを運用している。

(取組の効果に対する評価)

- 「高等部らしい学びが提供されているか」(問 5)に対しては、生徒の回答は肯定的な評価(強くそう思う・そう思うの合計・以下同)が 90.2%と高い水準を維持しており、高等部の学びは総合的には概ね良好な状況といえる。
- 教員の「高等部らしい学びを意識しての教科目標の設定ができているか」(問 10)に対して否定的な評価(あまりそう思わない・まったくそう思わないの合計・以下同)が 14.3%を示すのは好ましくない。同様に、「新しい学力観に基づく教科目標の設定」(問 11)においても教員の否定的な評価は多い(21.4%)。観点別評価については、新しい取組であるが、本校独自の学びとしてこれまでに実践されてきた平常評価の要素を可視化するという方向性で進めてきた。今後、教員間での教科目標の確立が急務といえる。
- 評価においては、生徒からは的確な評価に関する設問(問 13)で 17.1%、多様な手法・視点に関する設問(問 14)で 17.1%と、ともに否定的な評価が少し高い水準にある。一方で、教員は多様な手法や観点での評価(問 20)について、否定的な評価が 10.7%にとどまっており、教員との意識の相違がみられる。
- 高等部らしい学びとしては、2、3 年生の選択授業もその一環であり、生徒、保護者、教員ともに選択授業への肯定的な評価は多い。
- 今後の学びの核となる探究型の学びについては、社会的課題への関心や取り組む姿勢についての質問(生徒・問 12、保護者・問 6)で、生徒(87.2%)・保護者(89.3%)と肯定的な評価が高い水準を示しており、一定の成果といえる。
- 探究型の学びにおいては、2 年生全体を対象にした地域探究プログラムが定着してきた。JTB や周辺自治体との連携により、生徒は実地研修やより実践的な計画、自治体の方に向けてのプレゼンテーションなど、実社会に働きかけることのできる貴重な経験が出来ている。
- 少人数の探究科目では、2 科目を追加し、より広い分野の関心を吸収できるようになった。
- 高等部が主催する探究の集いは、高いレベルの高校生の研究発表に触れられる機会として定着しつある。この行事には、各校の生徒・教員に発表の機会を提供するだけでなく、生徒や教員が交流するプログラムが組まれている。これにより、本校の探究科目受講生の発表、教員研修の機会となるだけでなく、生徒交流プログラムそのものを生徒が企画運営することそのものが貴重な学びとなっている。
- 学びの基盤といえる部分については課題も多い。生徒からは授業の工夫(問 7)で 26.3%、授業の興味深さや知的好奇心(問 10)で 20.7%と否定的な評価が高い水準となっている。ここでも教員は授業研究(問 14)に対して否定的な評価が極めて低く(5.4%)、意識のずれが生じている。
- 「補習が適切に行われているか」については、生徒(問 9)で 15.9%、保護者(問 4)で 27.8%、教員(問 16)で 23.2%と、いずれにおいても否定的な評価が高い。生徒の実感が高い点、生徒・保護者に一定のニーズがあること、補習を行う教員の側にも危機感があることを示している。

	● 進級・推薦・卒業、進学などに関する説明については、生徒、保護者とも概ね良好な状況が続いている。 ● 今回の結果において重大な課題と認識しているのは、生徒の自己分析から始まる、大学進学にとどまらない進路指導である。まず「的確な自己分析ができているか」については、生徒(問 15)で 19.7%、保護者(問 9)で 24.2%、教員(問 21)で 35.8%と、いずれも否定的な評価の割合が高い水準にある。同様に、自己分析の表現と進路への活用においても、生徒(問 16)で 21.7%、保護者(問 9)で 24.2%、広く生き方に関わる進路指導でも生徒(問 17)で 27.2%、保護者(問 10)で 27.5%と、一定の不安があることが見受けられる。この傾向は教員でも同じで、自己分析を表現しての進路指導への活用(問 22)で 30.4%、広く生き方に関わる進路指導(問 23)で 19.7%と否定的な評価が強い。これは受験にとらわれない学びを標榜している本校にとっては核心的な課題である。自分がどのような力を持っていて、どのような興味関心があるかを的確に自己分析し、学びの興味関心と結びつけ、積極的な進路選択(学びたいことで選ぶ)につなげていく進路指導の策定、また知識だけでなく考える過程、表現力(書く・話す)の育成が急務といえる。
今後の方策	● 最低限の学力保障については、現状の仕組みを継続することは大前提として、生徒の学力の状況にあわせ、さらなる充実が必要となる。 ● 生徒の自己分析から進路指導へとつなげる分野においては、外部の自己分析ツールや情報整理・表現のサポートを利用し、その効果を考慮してスケジュールを再編することが必要となる。 ● 受け身の学びや消極的な進路選択から主体的な学び、積極的な進路選択へ発展させるため、特に表現力(書くこと)の育成に取り組んでいく必要がある。 ● 実際の進路選択において、具体的には明確で積極的な志望理由を実現するため、学問的関心や一定の知識を得る過程、考察の訓練も必要となる。 ● 1、2 年生全体での探究型活動においては、取り組む期間を長くとり、2024 年度から選択制に変更した修学旅行との連動もあわせ、探究型の要素の定着を図る。 ● 少人数制の探究科目は 2024 年度から 7 科目に増え、担当教員も徐々に拡大している。探究科目間での課題や進捗の共有も密に行われており、持続的な制度として普及させていく。 ● 高等部らしい学びの柱でもある選択授業については、効果や取組の姿勢に濃淡が生じるようにもなっており、新しい講座の導入だけでなく、生徒の意識付けへの関与、さらにカリキュラムの見直しも含めて抜本的な見直しを始めていく必要がある。

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主性を育み、気持ちよく集団生活をおくるための生活指導を徹底】	自己評価	A
目標	学校のルールを守り、他者を気遣い、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	(具体的な取組の状況) ● 自律した学校生活を送るため、ルール・マナーの向上に対して、さらに具体的な指導を行う。そのため学校側からの一方的な発信だけでなく、生徒から自主的に発信できる組織を作り、自治を促した。 ● いじめを許さない環境づくりに向けて、更に講習会の制度を精査して関係機関と打ち合わせし、より具体的な事例や実際に同年代が巻き込まれた案件な		

	ども紹介し、危機感を生徒へ醸成した。 ● 登下校マナーの向上にも引き続き取り組む。これは登下校のピーク時に生徒の努力で改善できない事情（道幅・車の交通量）などもあるが、社会の一員として守るべき行動規範を更に教育した。 **（取組の効果に対する評価）** ● 学校生活の基本ルール・マナー向上に対する指導に関しては、生徒・保護者とも 80%以上の肯定的な回答を得ている。特に生徒（問 20）の認識は教員（問 27）より 8%近く（83.3%）高かった。これは生徒自らマナー向上を促す組織「ICT 委員会」によって、その使用時間や使い方の実例を他校と比較する講習会を持った。そのことも理由に挙げられる。 ● 「守るべきルールやマナーを明示し日々細かく指導している」に関しても、生徒（問 21）・保護者（問 13）は 80%以上の肯定感を持たれている。しかし前年比いずれも減じている。特に保護者は 3.6%低くなっている。これは生徒に配信した内容すべてを、保護者へ Classi 配信できていなかった事も関係する。 ● いじめを許さない環境づくりに関し、生徒（問 22）・保護者（問 15）とも 85%程度が肯定的であった。ただし本年度は具体的ないじめ案件は発生しなかったものの、教員（問 30）が 96.5%と認識しているのに比べると生徒・保護者の肯定感は 10%近く低かった。特に保護者（問 15）の肯定感は 86.4%あるが、2022 年度に比べて 2.8%低下している。2022 年度の学校側としての対応は目に見える形で保護者へ伝わったものと考えられるが、2023 年度については十分に伝えきれていなかったと考える。 ● トラブルや問題行動に対して早急な対応をしているに関しても、生徒（問 23）・保護者（問 16）は 80%以上肯定的である。しかし前年対比いずれも微減となっている。学校側ではより速やかに行動することを周知徹底したい。
今後の方策	● 自律した学校生活を送るためのルール作りやその順守、登下校マナーの向上に向けて、より具体例をあげて classi を活用していく。またクラスへ可視化した掲載物を用意して周知していく。加えて保護者向けの連絡は今年以上に回数を増やしていくことを考えている。 ● いじめを許さない環境づくりに関しては、学校側として最も重視していることを明確に発信し、いじめにつながるいじりを含めて、適切かつ早期な対応を取りたい。

評価項目 【テーマ】	**教育環境整備** 【生徒・教員の学びを促進する学校設備の整備・改善】	**自己評価**	A
目標	● 新しい学びに対応した施設・設備の充実を図る ● 探究型授業を軸としたカリキュラムの大幅改訂を見据えた、新しい時代の教育に対応できる教育環境をハード・ソフトの両面において整備する。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	**（具体的な取組の状況）** 1. 引き続き、生徒・保護者・教員の意見を聞きながら校舎の整備と維持・管理を行った。2023 年度も大きな施設・設備の改修や新設はなかったが、生徒総会での問題提起を受けての普通教室の生徒用机・椅子の整備等、より生徒の声を重視した整備に取り組んだ。 2. ICT 環境については、常駐の ICT 支援員のサポートにより、機器・ネットワークの運用や、1 人 1 台タブレット環境下での生徒・保護者へのサポートについても順調に推移している。2022 年度整備した、大学で不要となった什器や機器を利活用したアクティブラーニング用教室の運用も順調である。		

	3. 2022 年度の総合評価を踏まえ、築 30 年以上となる高等部校舎を、新しい教育の形に対応できるよう抜本的なリニューアルについての検討を開始した。 **（取組の効果に対する評価）** ● 2023 年度も高等部の教育環境整備に関連する殆どの質問項目（生徒(問 24、26、27)、保護者(問 17～18)、教員(問 33、34、36)）について、90%を超える高い肯定的評価を示している。引き続き本校の教育環境の整備が概ね順調に進められていると判断して良いと考える。2021 年度、肯定的評価が大幅に下落し、懸案としてあげた生徒と教員に共通する質問「男女共学化、生徒像に応じた施設・設備（トイレ・更衣室・食堂など）が十分整備されている(生徒(問 25)・教員(問 35))」においては、2021 年度からの推移として、生徒:72.2%→82.1%→86.9%、教員:64.2%→62.5%→71.4%となり、2023 年度はいずれも上昇した。生徒については 2022 年度より更に約 5 ポイント上昇し、下落を続けていた教員についても 2023 年度は約 9 ポイント上昇したことから、取組が評価されたと考えられる。 ● ICT 環境の整備・運用が順調であることは、関連する質問（生徒(問 26～27)・保護者(問 19)・教員(問 38～39)）にて引き続き肯定的評価が 90%を超えていることから確認できる。一方で 2022 年度と比較して、教員（問 39)「高等部は生徒 1 人 1 台環境を有効に利用している」において、94.7%→92.8%と約 2 ポイント下落した。しかしながらこれは、教員の ICT 活用能力の水準が 2022 年度からの推移で大きく向上した（問 40:88.7%→89.3%→96.4%）ことにより、より高度な活用を期待してのものであると肯定的に捉えている。
今後の方策	● 施設・設備の整備についてはこれまでと変わらず、生徒・保護者・教職員の声を聞きながら良好な維持・管理を続ける。 ● ICT 環境においては、関西学院の新たな「情報化計画」に沿った形で DX 化を促進していく。 ● （具体的な取組の状況）の 3.で示した、「老朽化した高等部校舎の抜本的リニューアル」については、現在、探究型のカリキュラムを柱としたソフト面での教育改革が進む中で、その実現のためにも必須であると考えている。長期的な展望とはなるが、2023 年度より関西学院施設部と話し合いを始めており、引き続き実現に向けた検討を進めて行きたい。

評価項目 【テーマ】	**人権教育** 【生徒が自分事として考える人権教育プログラムの実施と、希望者を募ったフィールドワークの実践】	**自己評価**	B
目標	● 聖書の価値観に立ちながら自己と他者の「尊厳」について理解し、互いの「尊厳」を守り合えるようになる。 ● 自身の内にある差別意識や偏見を客観視できるようになり、社会に存在する不平等と差別を直視する勇気を持つ。 ● 差別の具体的な歴史や現状を共感的に理解し、実際の差別に対して毅然と立ち向かえる態度を身に付ける。 ● 身に付けた人権意識をもとに、人々の尊厳が守られる社会的正義や平和構築のために貢献できる人になる。		
具体的な取組の状況とその効果に対する	● 各学年で、多様なテーマで人権教育プログラムを実施した。各学年のテーマと実施内容は以下の通りである。 〈1 年生〉1 学期：テーマ「いじめといじり」、LHR 1 回・HR 1 回・中休み 1 回		

評価	「自分と他者を大切にすること、傷つけること（尊厳教育)」、中休み２回 3 学期：テーマ「ジェンダー・セクシュアリティ」、HR 1 回・中休み 3 回を使用予定 〈2 年生〉2 学期：テーマ「部落差別」、HR 3 回を使用 3 学期 ：テーマ「障がい者と人権」、HR 1 回・中休み 2 回を使用予定 〈3 年生〉1 学期：テーマ「障がい者と人権」、中休み 2 回・HR 3 回を使用 2 学期 ：テーマ「伝える力聴く力」、HR 1 回・中休み 1 回を使用 ＊テーマごとに当事者や、最前線で問題解決のために活動する方を招いて話を伺った。事前・事後学習を講師の方と綿密に打ち合わせながら計画し、(生徒が少しでも自分事として問題を考えられるように）生徒への事前アンケートをもとに、講師に話を展開して頂くなどの工夫をした。 ＊各 HR での実施が難しい場合にも、視聴覚教室において学年全体がいる中でグループディスカッションを試みた。また、事後学習として、HR で Zoom をつないで全体講義とクラス内ディスカッションを試み、両方においてその手法を模索することができた。 ＊1 年生の尊厳教育では、全クラスの委員長に自身の体験にもとづいたロールプレイ動画を制作してもらった。自分たちの仲間が登場する事例動画をもとにディスカッションをすることで、より身近な事柄として議論できていた。 ＊人権学習のテーマとしては初めて「いじめといじり」を扱い、日常的ないじりがいじめに発展する可能性や、その問題の深刻さについて丁寧に扱った。 ● 積極的にいじめをテーマに教育を行った結果、学校評価アンケート教員(問 43)「高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる」という項目の肯定的な回答は、(「どちらかといえばそう思う」を含めると）2022 年度 92.9%から 2023 年度 98.2%に大きく増加し、生徒(問 29)も 2022 年度 86.8%から 2023 年度 89.1%へ増加した。しかしながら、保護者(問 20) 2022 年度 89.1%に対し 2023 年度 86.9%と減少した。学校としていじめを許さず、徹底的に防止に取り組んでいく姿勢を保護者に対しても具体的に示していく必要がある。 ● 学校評価アンケート保護者(問 21)「生徒自身が種々の人権問題について、より関心を持つようになったと家庭で感じる」は 2022 年度 71.0%から 71.4%とほぼ変化はない。また、生徒(問 30)「人権プログラムを中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている」についても、2022 年度 90.5%から 2023 年度 90.4%とほぼ変化がなかった。しかしながら、教員(問 44)「人権プログラムを中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている。」の肯定的な評価は 2022 年度 85.8%から 2023 年度 91.1%と増加した。効果を高めるためには、生徒が家庭で人権について自然に話題にしたくなるような、さらに「自分事化」できるプログラムの開発が必要である。また、保護者に人権教育プログラムの内容を周知するとともに、家庭で人権について話題のきっかけにできるよう、適切に情報を発信していく必要がある。 ● 2023 年度も、希望した生徒とともに障がい者自立支援センターを訪問し、障がい者の方々と交流したり、自立支援についての学びを深めたりする機会を持った。これを機に障がい者自立支援センターで介助者アルバイトをする者も現れ、例年に引き続き先輩から後輩への橋渡しをすることができた。人権教育プログラムの中で、介助者経験のある卒業生に現場の経験を話しに来てもらうこともできた。

	● 部落差別のテーマでお招きした講師の先生を通して、春休みに希望者を募って住吉地区へのフィールドワークを実施する予定である。学外の社会福祉体験を行った者や障がい者自立支援に携わる者などを中心に、人権と活動に関心のある生徒を引き続き把握しながら実現したい。 ● 9月に全学年一斉に「いじめアンケート」を実施した。アンケートで明らかになった事例については学年団・人権教育推進委員会・生徒指導委員会・運営委員会で情報を共有しながら慎重に対応した。2023年度からは、人権教育推進委員会主導で対応方法を整理・決定し、各学年の生徒への聞き取りにも適宜人権担当の教員が関わった。このように、人権教育推進委員会のアンケートに関する役割を明確化したとともに、具体的な関わりを強化した。
今後の方策	● 各学年の人権担当とさらに協働して、学年の意向を反映した人権教育プログラムを行う。人権教育プログラムの展開事例を蓄積していき、最終的には、担任ごとに積極的に人権教育を実施できるようにしたい。 ● 教員各々の人権教育への理解の深化と、人権意識の向上。そのための充実した教員研修を実施する。 ● 人権的課題に興味を持っている生徒とのつながりを強化し、継続的な活動作りを行う。

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な諸問題を含む国内外の社会的課題の解決への関心・意欲の育成】（重点）	自己評価	A
目標	● 文部科学省から採択を受けた3年間(2019-2021)のWWLCを自走、継続する形で、授業や課外活動などの学校全体の様々な教育活動を通して、SDGsに代表されるような国内外の社会的課題の解決に主体的に関わろうとする姿勢や、多様な価値観を学ぼうとする意識を育む。 ● 国内外で開催される国際交流プログラムを紹介し参加を促すことを通して、国際理解に関わる学びを深める機会を提供する。 ● 中期・長期留学、海外語学研修、フィールドワークなどといった国内外での活動への参加を促し、本校でも留学生を積極的に受け入れることで、学校内外での国際交流の場を作り出す。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ● 2023年度は合計11名が海外留学に出発した。内訳は以下の通りである。 2学期：イギリスに中期留学生1名、アメリカに長期留学者2名 3学期：オセアニアに中期留学生6名、NZとドイツに長期留学者各1名 円安の影響もあってか2022年度の19名からは数が減ったものの、海外留学への関心は依然高く、留学選考会には例年以上の応募数があり、2024年度の出発が確定した者は既に5名いる。 ● 海外からの留学生として、アメリカから1名（AFS)、オーストラリアから1名（日豪協会)、合計2名を第2学年で受け入れている。両名とも本校の授業や学校行事、クラブ活動に積極的に取り組むなど、日本国内における異文化交流の場を提供してくれている。 ● 「KGH SUMMER ENGLISH CAMP@TOKYO」と題して3泊4日の国内英語研修旅行を2023年3月28日～3月31日に実施、12名が参加した。東京にある英語研修施設、東京グローバルゲートウェーにて海外留学を意識した実践的な英語を体験、海外からの留学生と表参道でフィールドワークを行うという内容であり、今回で2回目の実施となった。 ● 海外の高校から2回表敬訪問があり、5月にはスウェーデンの高校から15名		

が、6 月にはアイスランドの高校から 14 名が来校した。本校の生徒とバディを組んで授業に参加、昼食を一緒に食べ交流会を実施、プレゼンテーションをしてもらうなど、実りある国際交流の機会が持てた。

- 7 月には英語科が企画、運営をした英語スピーチコンテスト「Crescent Cup」を初開催した。生徒 12 名がネイティブ教員と 1 対 1 の指導を受けながら約 1 か月をかけて準備をし、最後に英語スピーチを披露した。上位 3 名は兵庫県スピーチコンテスト阪神大会に応募、全員合格し、本戦に出場した。その内の 1 名が県大会にも進出することができた。多くの生徒達が放課後に残ってネイティブ教員と共に一生懸命英語の練習をしていた姿が大変印象的であった。
- オーストラリアの提携校を訪問する 2 週間ほどの語学研修旅行を企画していたものの、現地校の事情によりそれが中止になってしまったのは大変残念であった。2024 年度に向けて、既に別のオーストラリアの提携校と企画を進めており、こちらは現在順調に計画中である。
- 夏休みには With The World 社と企画した 5 泊 6 日のフィリピンフィールドスタディを実施し、17 名の生徒たちが参加した。急速な経済発展を遂げるフィリピンで現地の NGO や大学生と共に、スモーキーマウンテンを見学したり高校生や子供たちと交流する中で、幸せとは何かを考えるスタディツアーであった。生徒たちにとっては学びと刺激の大変多い海外体験となった。
- 様々な国際交流イベントに生徒たちは参加した。夏休みには、関西学院大学が主催する他校の高校生と日本に来ている海外からの留学生との国際交流イベント「高校生国際交流の集い」に 6 名が 1 泊 2 日で参加した。「関西学院世界市民明石塾」では、審査に合格した 3 名が 3 日間に渡り英語で国際問題について学ぶ機会を得た。また東京で開催された 3 泊 4 日の「かめのりスクール 2023」には、審査に合格した 1 名が参加し、海外からの留学生と共に協働ワークキャンプを行った。FedEx Express/Junior Achievement International Trade Challenge 2023 国際ビジネスプランコンテストには、残念ながら 1 次合格とはならなかったが 2 名がチャレンジした。その他様々な課外活動に参加する生徒が見られた。
- 探究型カリキュラムにおいては、教育目標である「SDGs の達成を目指し、Mastery for Service を体現する世界市民の一員として、国内外の社会に自ら関わり貢献できる力を身につける」のもと、各授業を中心に様々な取組、イベントが展開された。以下は一例である。

1. 2、3 年生の「グローバルスタディ」においては、Zoom を通じて定期的に海外の高校生と積極的に意見を交わしながら協働プロジェクトに取り組むなど、国際的な視点を得ながら学びを深めた。2 年生は夏休みに東京の国連大学を訪れ学びを深めた。ある 1 つのチームは 3 月に長崎県教育委員会主催「令和 4 年度 WWL 探究発表会」にて優秀賞（1 位相当）を受賞、夏にはアイスランドでフィールドスタディを行うなど活動を広げている。また 3 年生の 1 名は 12 月に文部科学省主催の「全国高校生フォーラム 2023」に出場、全国の SGH/WWL 校が集まった東京会場で、英語でポスタープレゼンテーションを行った。
2. 2、3 年生の「ピーススタディ」において、3 年生は横須賀学院や防衛省を訪れ、2022 年度の鎮西学院でのフィールドスタディに続き、平和についてさらに考察を深める機会を得た。
3. 2、3 年生の「AI 活用」は関西学院大学工学部の教授、ゼミ生の指導をいただきながら AI を用いた社会課題解決に取り組んだ。2022 年度の 3 年生は 2 月

に開催された教育と探求社主催の「クエストカップ全国大会」では見事グランプリを受賞した。本年度もエントリーをしている。

4. 探究型授業をさらに広げるために、2023 年度より 2 年生の必修選択授業を 2 科目新しく開講した。「サイエンス探究」と「2023 年度アート思考」である。それぞれ生徒たちの関心のあるテーマに合わせ、前者は武庫川での生物調査を行ったり、後者は香川県の家島でのアート研修旅行に赴くなど、様々な学外の場所に訪れることを通して、探究学習を進めている。
5. 1 年生の探究 Basic においては、例年同様、自分たちの関心のある社会課題に実際に取り組んでいる 10 以上の地方自治体や企業などを訪れ、インタビューを行うなどのフィールドスタディを行った。
6. 1，2 年生の学年行事として、2023 年度も SDGs について理解を深める学年行事を開催した。1 年生はマシュマロタワーゲームやカードゲームを用いて楽しく SDGs や協働することを学んだ。2 年生は「地域探究」と題して、地方自治体が抱える問題（ミッション）を、グループごとに実際にその地域を訪れて解決方法を探り、発表するという活動を行った。
   2024 年度の 2 年生の修学旅行には探究的要素を取り入れるべく、企画が進行中である。
7. 7 月に開催された日本経済新聞社主催の「日経 STEAM シンポジウム 2023」に 2 年生 4 名が参加し、 全 6 回のオンラインディスカッションにて指導を受け、大阪国際交流センターにて ICT を用いたビジネスプランの発表を行った。残念ながら受賞はできなかったが、有意義な学びを得ることが出来た。
8. With The World 社主催の「次世代を担うリーダー育成プロジェクト」に 2 グループ（合計 6 名）が参加し、海外の高校生と協働し、企業の指導を定期的に受けながらプロジェクトを進行している。2 月には世界合同プレゼンテーションを控えている。
9. 2022 年度に引き続き、12 月には高等部主催、Classi 株式会社と関西学院大学の後援で「中・高生 探究の集い 2023」を関西学院上ケ原キャンパスで開催した。全国から 39 校、300 名程度の生徒と教員が参加し、各学校の探究活動をコンテスト部門、オープン部門（ポスター発表）で披露した。高等部からは 4 グループがエントリーし、生徒が主体的に運営に関わった。2022 年度よりも規模を拡大して行い、参加者全員にとって学びの多い一日となった。2024 年度も開催予定である。

（取組の効果に対する評価）

- 「授業や行事を通じて国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる（生徒）/高める努力をしている（保護者・教員）」という項目について、生徒（質問 31）は 83.8%（昨年比+2.4）、保護者（質問 22）は 85.6%（昨年比+1.5）、教員（質問 45）は 92.9%（昨年比－1.8）の肯定的な回答を得た。2022 年度に大きく上昇した項目だが、2023 年度はそれとほぼ横ばい、生徒・保護者においては微増した。SDGs に関わる授業や学年行事、様々な学内外活動に参加する機会などの多種多様な取組を通して、多くの生徒たちにそれらについて考えるきっかけを提供できているのではないかと感じる。
- 「授業や行事活動で、語学力や国際性を身につけることができるプログラムなどが高等部で提供されている」という項目について、生徒（質問 32）は 86.8%（昨年比+2.8）、保護者（質問 23）は 84.4%（昨年比－0.5）、教員（質問 46）は 92.8%（昨年比－3.6）となっており、2022 年度とほぼ同様の高い水準で肯定的な回答を得た。英語科の授業で導入している Weblio オンライン英会話授業

	も3年目を迎えた。また、2023年度からは新たに英語科主催の英語スピーチコンテストも始まり、フィリピンスタディツアーも実施することが出来た。2024年度には英語語学研修をコロナ前のように実施することなどを通して、様々な機会をさらに提供していきたい。 ● 「将来、機会があれば留学や渡航をしたいと感じている(生徒)/意欲を育んでいる（保護者・教員)」という項目について、生徒（質問33）は77.2%（昨年比+4.8)、保護者（質問24）は75.4%（昨年比+1)、教員(質問47)は91.1%（昨年比−5.3）が肯定的な回答であった。生徒たちの意識は2021年度から少しずつではあるが上昇してきている。円安の影響は大きいが、海外に行ける機会が実質的に増えているので、生徒たちの意識がより海外に向くように促したい。 ● 「授業や行事などを通して、生徒が社会的課題に対して関心を持ち、取り組もうとする姿勢を育んでいる」という項目については、生徒（質問12）87.1%（昨年比+2.5)、保護者（質問6）は89.3%（昨年比−1.5）と、両者共に2022年度とほぼ変わらない高い水準での肯定的な回答を得ることができた。教員(質問18）についても94.7%(昨年比+3.6)と同様である。学年・学校行事、国際交流部、探究型授業の取組など、全学的な広がりを今後はさらに質の高いものにしていきたい。
今後の方策	● 2023 年度新しく実施したスピーチコンテストや海外フィールドスタディのように、さらに積極的にそのような機会を生徒たちに提供していきたい。受け身ではなく、主体的に「関わりたい」と思えるような、魅力的な国内外の国際交流プログラムを開発し、数多く紹介していきたい。 ● 2024 年度も 2023 年度同様、探究型授業をさらに増やすことなどを通して探究的な学びをさらに充実させていくことを構想している。答えのない問いに対して、生徒たちが主体的に取組、大学での専門的な学びにつながるような深い学びの機会を、授業や行事などのあらゆる場面でさらに提供していきたい。

総合評価

2023年度は新型コロナウイルス感染症が5月に5類へと移行したことに伴い、学校における教育活動が、ほぼコロナ禍前に戻ったことで活動範囲が広がり、特に海外での活動や学外での対面の活動が復活したことによる変化が、アンケート結果に少なからず反映されていると捉えている。

キリスト教主義教育については、生徒・保護者・教員ともに浸透していることが結果からも伺え、しっかりと関西学院の理念とともに受け継がれ、確かに共有されて、高等部教育において重要な位置づけにあることが理解されていると言える。海外での活動をされている団体を招いての礼拝も復活し、様々な場でキリスト教を土台とした働きをされている方々の話を聞く機会ができ、“Mastery for Service”を体現する世界市民」を考える機会が戻ってきたことも大きな要素である。

教育課程・学習指導に関しての評価を2023年度は「B」とした。学習指導要領改訂や観点別評価の導入などに伴い、大学受験に縛られない高等部の教育を適切に測る指標、評価項目の変更・追加を行ってきているが、生徒・教員ともにいまだ従来の観点から脱していないところがあり、それがアンケート結果に表れていると考える。大きな変化の中であるので時間を要すると考えられるが、その変更内容等への理解を深めて、教員が新しい観点に則って評価し、生徒が評価されていることを実感することが必要である。今後の検討課題として認識し、経年での分析を継続していく必要がある。

高等部の教育の軸となる主体的な学び・探究型の学びについては「探究型カリキュラム委員会」も拡大し、多くの教員がその手法や評価法などについて実践と研修を重ね、また新たな特徴的な選択科目の開講を2023年度も行った。様々な新しいタイプの授業を導入してきており、教授法を含

めてまだまだ発展途上で改善すべきところがあることを認識しているが、それがアンケート結果にも示されている。ただ、アンケート結果にあるように教員の授業研究に対する意識は高く、この方向性については生徒・保護者からも理解を得ていることもその結果からもわかるので、着実に改善を加えながらより設定科目の内容精査とともに、その目標をしっかりと達成できるように、主体的な学び・探究型の学びをブラッシュアップさせていきたい。

進路指導、関西学院大学への接続に関する情報については、生徒・保護者・教員とも情報を得られているという実感を持っているが、AiGrow の活用での自己分析や大学進学にとどまることのない進路指導には十分には至っておらず、生徒・教員ともに的確な分析と、それをもって進路指導につなげる手段などの改善を図る必要があることがデータとして明らかになった。

生徒指導面においてはほぼ例年通りの評価結果であるが、大きな指導方針は保護者にも十分な理解を得ているものの、日々の指導についての情報量の差が生徒と保護者との評価結果の乖離に表れていると思われる。また、問題行動やいじめに対する姿勢や対応については 2023 年度もよい評価を得ていることから、学校としてのこれらの問題等に対しての迅速な対応と、それらに対峙する姿勢が一定の評価を得ていると考える。

教育環境整備に関しては、一人 1 台タブレット必携となってからは生徒・保護者・教員の高い評価を受けており、また生徒の要望を汲んだ改善を行ったことも、よりよい評価へとつながった。ただ、目標に掲げた探究型授業を見据えた教育環境整備については、築 30 年以上となる男子校時代に建てられた校舎内の抜本的なリニューアルと併せて、今後はその目標達成のために法人とも話し合いを重ねながら実現に向けたい。

人権教育は、その理解を深めるための新しいプログラムや様々な形でのアプローチが展開され 2 年目となり、まだその目標が十分に達成できていないとの判断から評価は「B」であるが、その効果がアンケート結果にも反映されている。ただ、保護者にはその成果がよく見えないのも事実である。生徒の中には具体的な行動につなげる生徒も増えてきているが、今後は外部にも展開するようなアクションを伴う活動や、「自分事」として考える機会を提供しながら、更なる人権意識の向上に努めたい。

国際理解教育においては、海外へのプログラムや国内での対面での活動が可能になったことから、生徒にとっても身近なものとなり、それがアンケート結果にも表れている。また、国際理解にとどまらない、探究型授業から派生したフィールドワークなどの活動やイベント、発表の場への参加のプログラムが多数展開されており、生徒への関心の喚起につながっているがアンケート結果にも表れており、将来への希望にも影響を与えていると考えられる。

教科横断型の「探究型カリキュラム委員会」が設けられ、年々この委員会に関わる教員が増えていくことで、高等部の教育目標がさらに精緻に策定・設定され、その理念が広がりを見せている中で、今後の高等部教育全般の改善を推し進めながら「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」をもって、関西学院が目指すところのグローバルリーダーである「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成にしっかりとつなげていきたい。

2023 年度の評価をふまえて 2024 年度に予定している評価項目、テーマ等

2024 年度は、評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、WWLC 事業後に引き続き継承していく「探究型カリキュラム委員会」を立ち上げての教育改革に関するところの評価は当面「教育課程・学習指導」、「国際理解教育」の評価項目でカバーする予定である。男女共学を意識した評価項目を設定していたが、共学化が定着したことから、インクルーシブでダイバーシティなコミュニティーの実現に向けての評価項目の見直しは 2023 年度も着手できなかったため 2024 年度の検討課題とする。

第三者評価／学校関係者評価

高等部最大の行事のひとつ、文化祭を 11 月 3 日に訪問しましたが、活気ある生徒の皆さんの姿に、スローガンの“Breakthrough”を実感しました。学校の教育活動が新型コロナウイルス感染症が流行する前にほぼ戻ったことを嬉しく思います。生徒・保護者・教員のアンケート結果に関しては、コロナ禍の中でも決して否定的なものではありませんでしたが、今年度は全体的にさらに高い評価となりました。もちろん高等部本来の教育活動を取り戻せた機運も反映されているでしょうが、継続的な改善の取組の成果であることも確かです。全体として高く評価できると思われます。

続いて各評価項目へのコメントです。

＜キリスト教主義教育の実践＞

継続的に取り組まれた成果でしょう、早朝祈祷会への出席者数の増加を高く評価します。コロナ禍の危機の中で、本学のキリスト教主義教育は確かな拠り所でしたが、日常を取り戻していった今年、礼拝堂への出席者数がさらに増えたことは特筆に値します。世界のさまざまな惨禍を耳にし、そこで苦しむ人々のことを思い、その安らぎを祈る生徒も多かったことでしょう。キリスト教主義教育が着実に根付いたことの証左と思われます。

＜教育課程・学習指導＞

探究科目や選択科目の追加、地域探究プログラムの実施等、新たな取組がなされました。「高等部らしい学び」の体系が整えられ、全国各地から多数の高校が集まる「探究の集い」の主催校にふさわしい教育課程を備えつつあるといってよいでしょう。複雑な時代のニーズに応える取組であるため、たえざる修正・改善が求められざるをえませんが、引き続き教員のご尽力を願います。他方、自己評価において「生徒の自己分析から始まる、大学進学にとどまらない進路指導」を最大の課題とされています。確かに、生徒の「高等部は、大学進学だけにとらわれない、広く生き方に関わる進路指導をしている」（問 17）は、肯定的回答と否定的回答の乖離が目立ちますし、否定的回答の内実を丁寧に把握する必要があるように思われます。たとえば、この課題に関わる生徒・問 15、問 16、問 17 への否定的回答は同一人物である傾向が高いと推測されますが、補習等の質問項目（問 9）でも同一の生徒が否定的に回答しているようであれば、基礎学力の不安も連動している可能性を考えてよいかもしれません（そうでない場合は、職業への適性の洞察などが課題となるでしょう）。補習等に関しては教員間でも問題意識が強い（問 16）ようですし、また基礎学力の不安への対処として外部テストの活用（教員・問 19）の意義も再認されるかもしれません。いずれにせよ、的確な自己分析とその表現に基づき、大学進学だけにとらわれない、広く生き方に関わる進路を考えることができる――言うは易く行うは難しの課題です。丁寧な分析に基づき、粘り強く生徒と向き合い続けながら、この課題に取り組むことを願います。

＜生徒指導＞

基本的なルール・マナーの指導の徹底がうかがえ、高く評価します。具体的ないじめ案件がゼロだったことは、その成果だと言えるでしょう。生徒主体の ICT 委員会による情報モラル向上の取組も効果をあげているものと思われます。

＜教育環境整備＞

整備の順調な進捗をうかがうことができました。生徒総会での問題提起を反映した整備が、生徒にとっても実感を持って受け止められているものと考えます。高等部校舎の抜本的なリニューアルの検討をこれから進められるとのことですが、新しい学びの活きるものになることを期待します。

＜人権教育＞

多様な人権教育プログラムを実施され、テーマや実施形態に関しても工夫を凝らされていました。教員における人権問題へ取り組む意識の高まり（問 44）は高く評価できます。いじめ防止への取組に関しては、保護者の関心も高いところですので、適切な情報発信に取り組んでいただきたく思います。

＜国際理解教育＞

コロナ禍の制限・制約の解除される中、海外留学、留学生受け入れ、国内英語研修旅行、海外の高

校の表敬訪問受け入れ、海外フィールドスタディ、英語スピーチコンテスト、国際交流イベントへの参加など、多くの国際理解教育が実現されたことを嬉しく思います。探求型カリキュラムがその核になっていることも高く評価します。コロナ禍での国際理解（教育）への渇望が、ようやく癒されてきたといってよいでしょう。留学や渡航への関心は高く（生徒・問 33)、それに応える教育が引き続き発展することを願います。

関西学院高等部を訪問するたびに感じることは、上ケ原キャンパスの統一美の中にある凛とした佇まいとそこから醸し出される伝統や文化の香りです。それは、廊下や教室、通学路で見る高等部生の姿からも感じられます。身だしなみに清々しい母校への誇りがあふれています。アンケートの集計データを見るまでもなく、この学校がどのように運営され、生徒たちがどのような学校生活を過ごし成長しているのかが容易に想像できます。

今年も、キリスト教主義教育の実践ですばらしい成果をあげています。「高等部の教育の根幹をなす」と述べられていることが、学校のステークホルダーの一人ひとりに共有され理解されていることに他なりません。それが自主的に早朝祈祷会に参加する生徒の増加や、様々なボランティア活動への活発な参加にもあらわれています。

教育課程・学習指導ではアンケートの結果を厳しく分析していますが、どの質問項目も肯定的な回答が 4 分の 3 以上あり、良い実践が継続されていることがわかります。「教員の授業研究に対する意識」の高い教員の総力でさらに良い成果が出ることが予想されます。探究学習では、高等部が主催してくださった「探究の集い」、「探究交流会」などに関西学院千里国際高等部の生徒も参加し、貴重な学びと体験をしました。また高等部生が、個人研究の過程で同校に見学に訪れた例がいくつかありました。今後も探究学習のパートナーとしての交流をお願いしたいと思います。

生活指導、教育環境整備、国際理解教育における評価項目でも、引き続きすばらしい成果をあげています。規模の大きな学校でこのような高い評価結果を毎年継続して達成するのは、教職員組織が全体として健全で安定していること、個々の成員どうしが肯定的、生産的につながり相乗効果をあげられていることからによるものでしょう。それが保護者の方々からの信頼、賛同につながり、学校共同体として価値観や目的を共有する総体を創り出しているのだと思います。

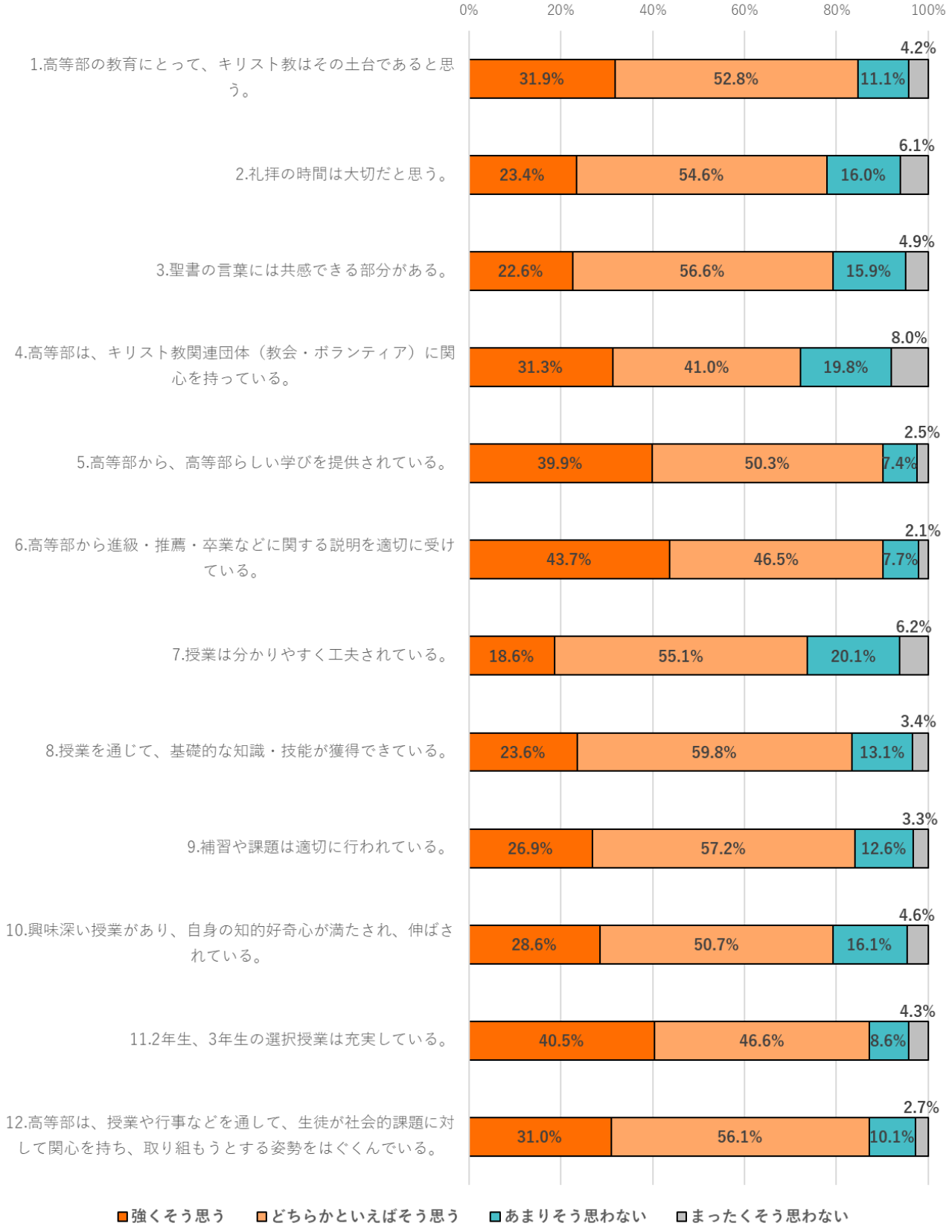
最後になりましたが、高等部生が校外でも様々な領域や場面で活躍され、すばらしい成果をあげていることにも感服する次第です。

2023 年度学校評価

2023年度　学校評価アンケート集計結果

高等部・生徒（回答率 101.5%　回答1,164人/対象1,147人）

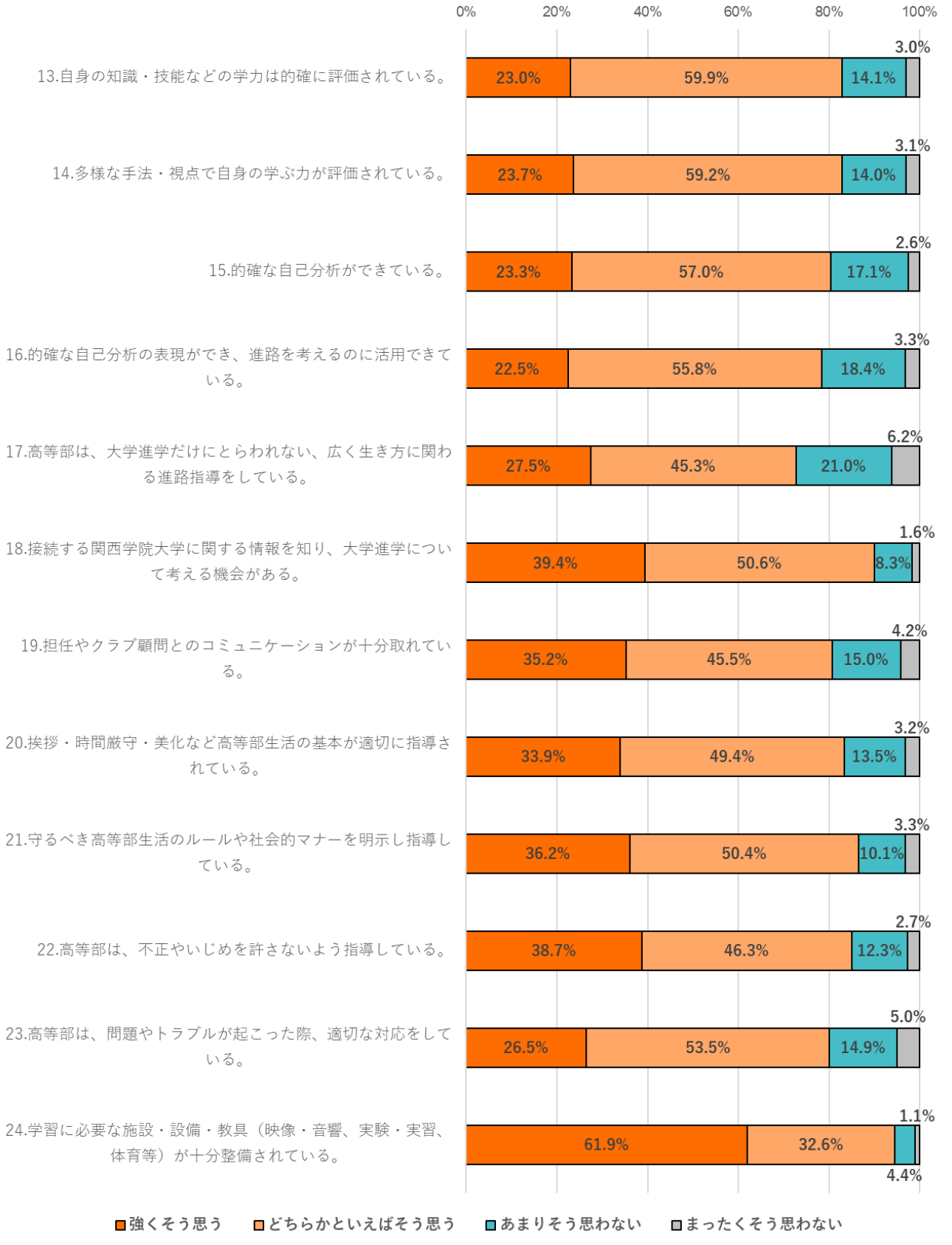
※複数回回答いただいたケースがあり、100%を超える回答率となっています。



2023年度　学校評価アンケート集計結果

高等部・生徒（回答率 101.5%　回答1,164人/対象1,147人）

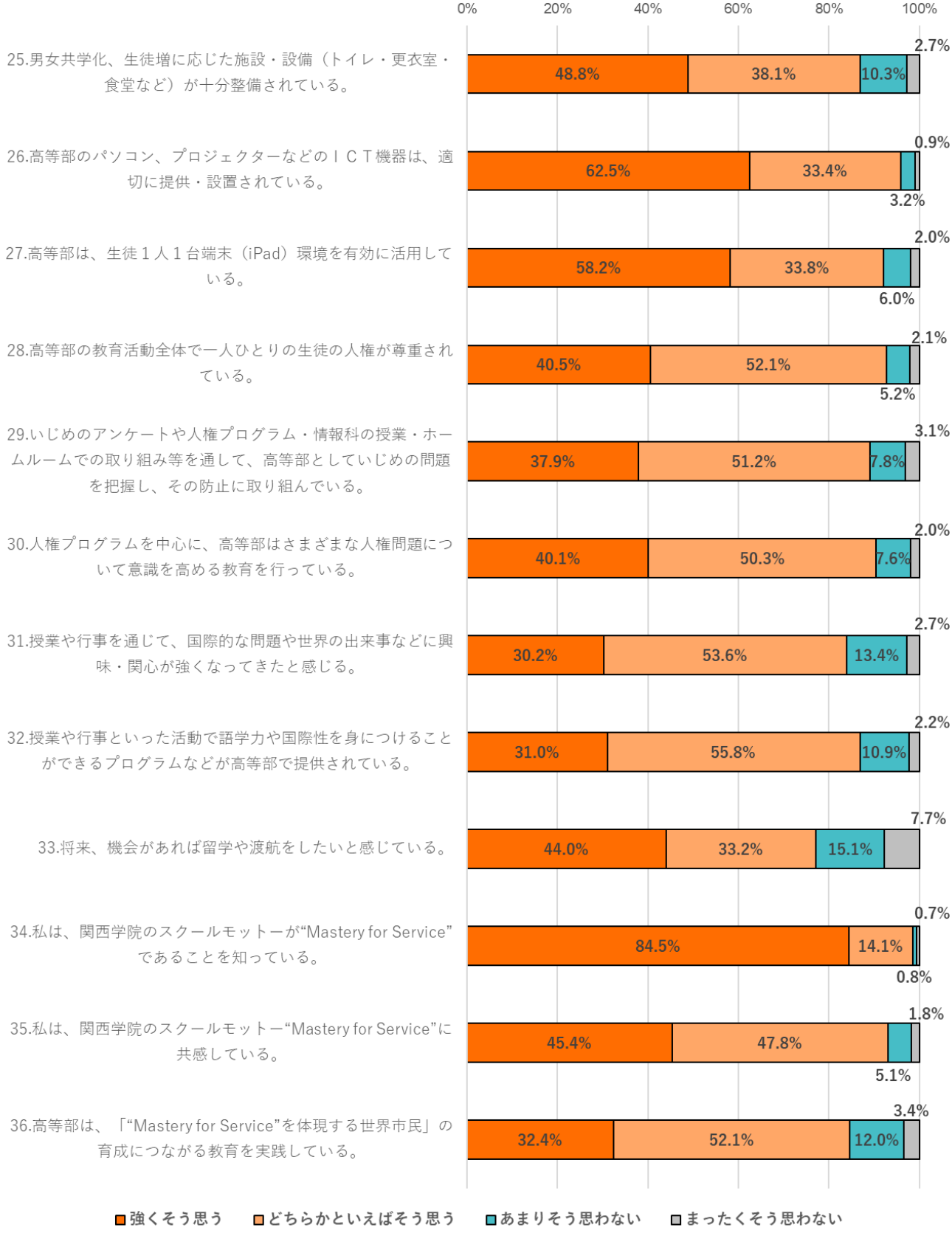
※複数回回答いただいたケースがあり、100%を超える回答率となっています。



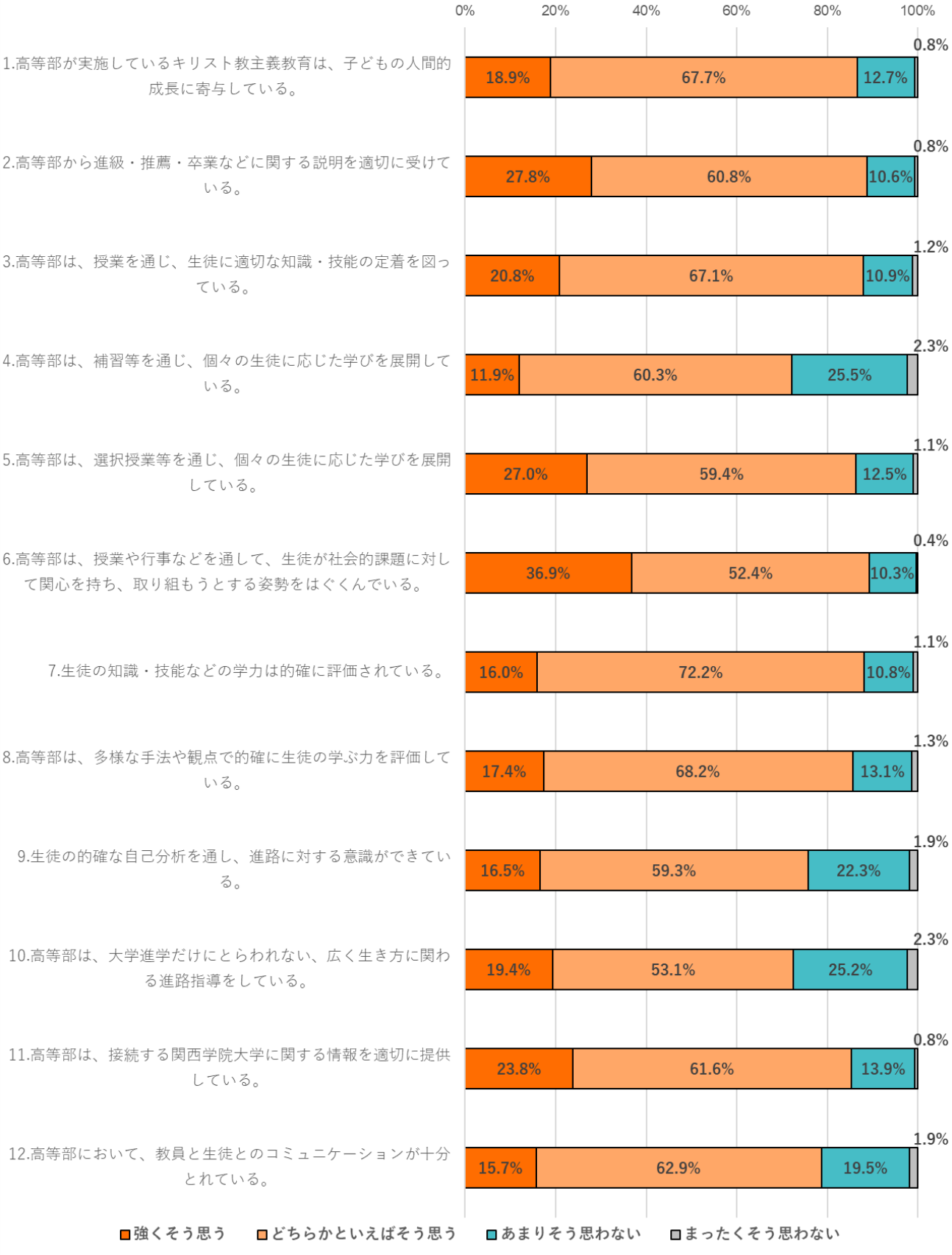
2023年度　学校評価アンケート集計結果

高等部・生徒（回答率 101.5%　回答1,164人/対象1,147人）

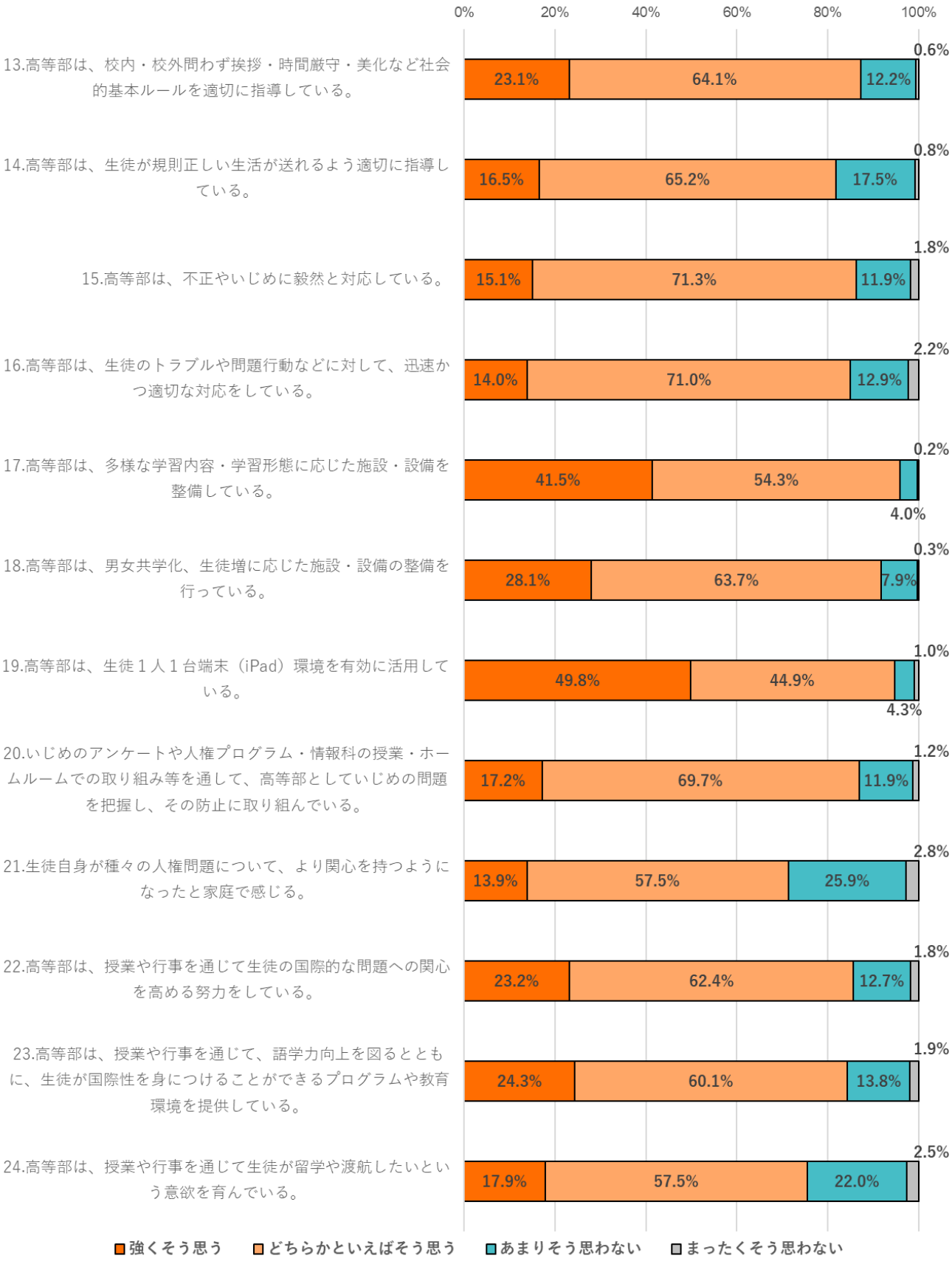
※複数回回答いただいたケースがあり、100%を超える回答率となっています。

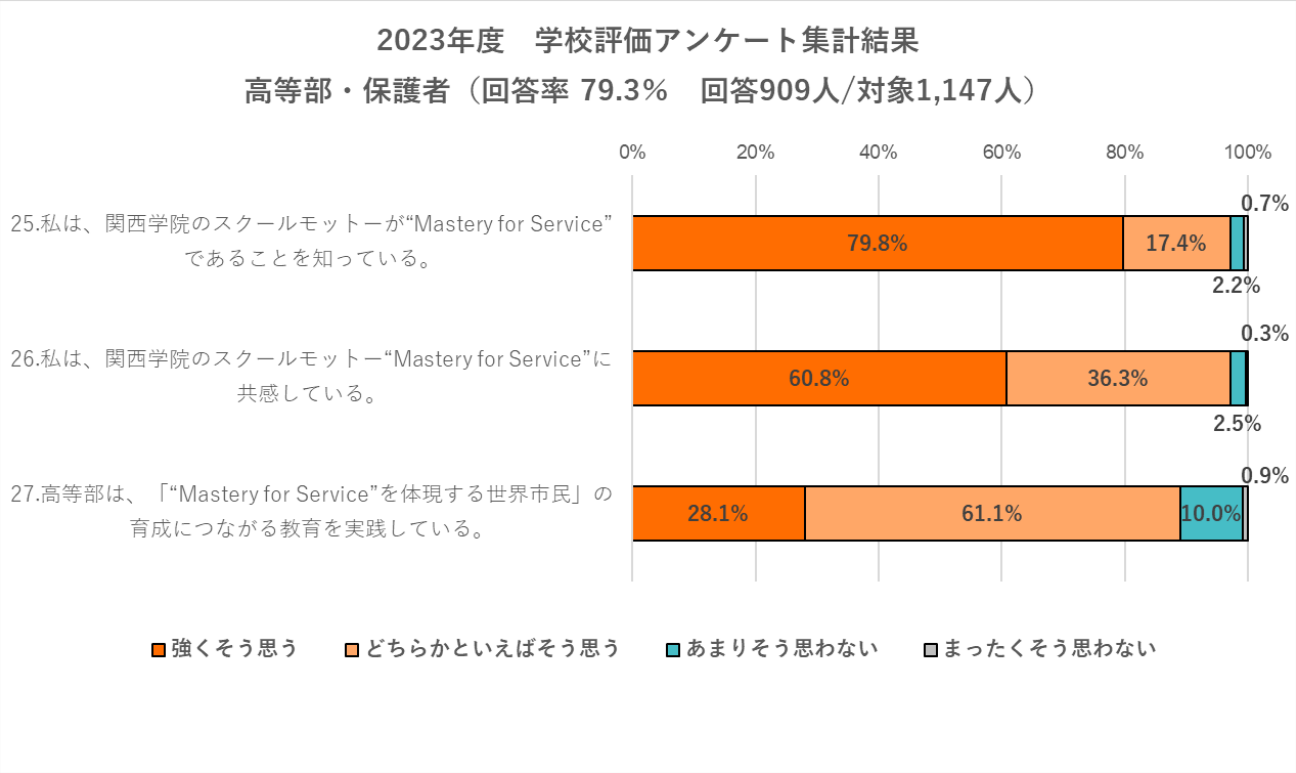


2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者（回答率 79.3%　回答909人/対象1,147人）

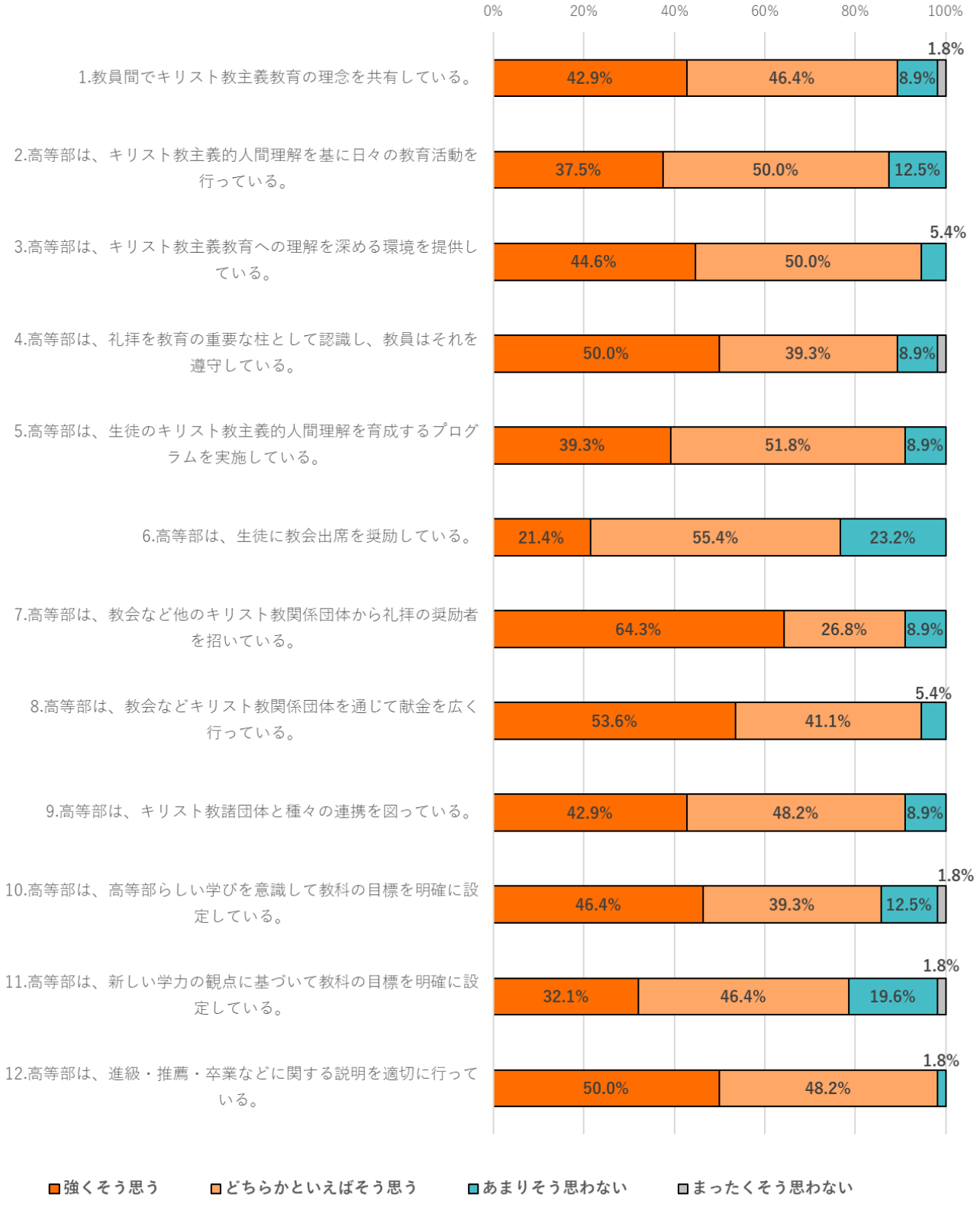


2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者（回答率 79.3%　回答909人/対象1,147人）

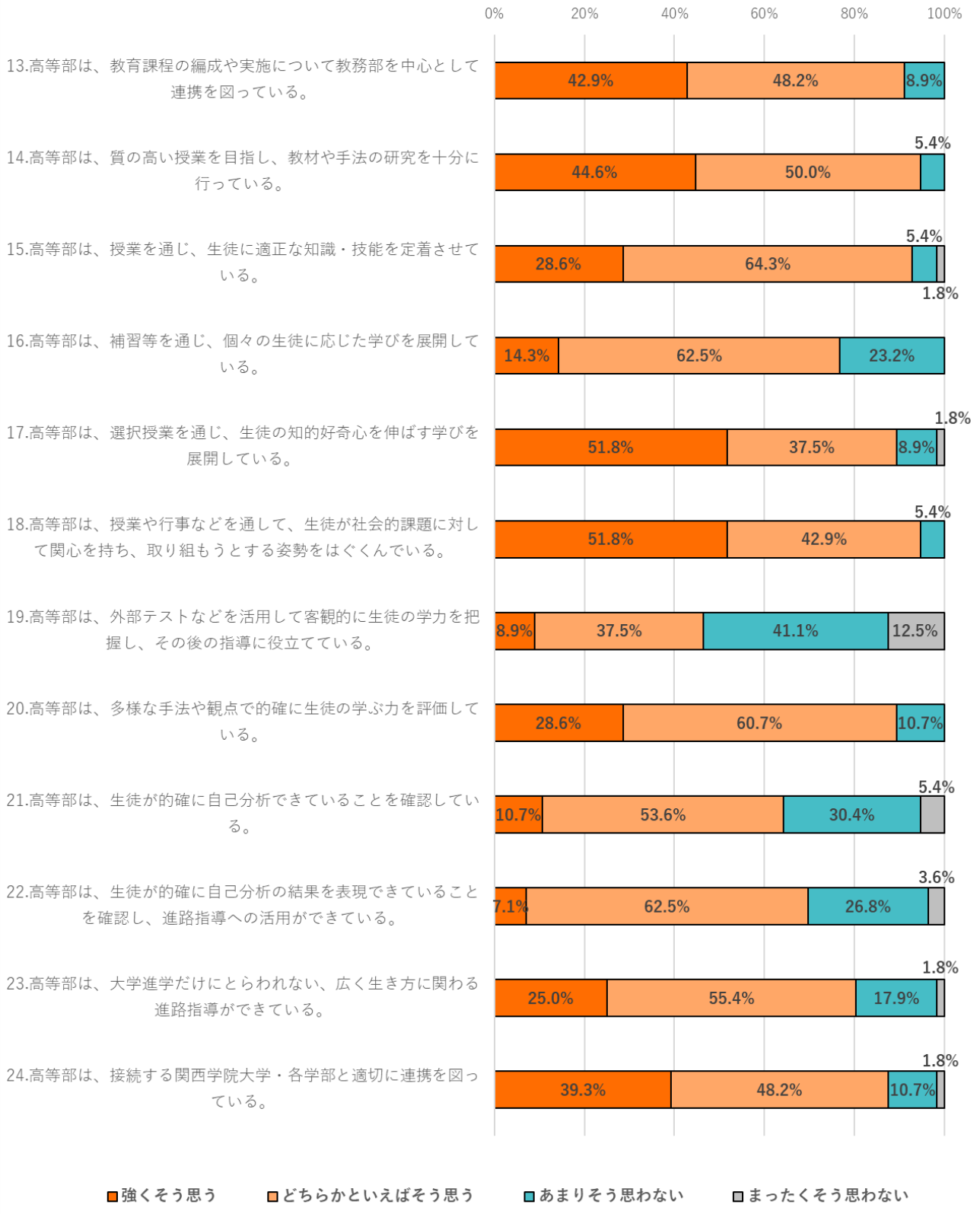



2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者（回答率 79.3%　回答909人/対象1,147人）
0%
20%
40%
60%
80%
100%
25.私は、関西学院のスクールモットーが“Mastery for Service”であることを知っている。
79.8%
17.4%
2.2%
0.7%
26.私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に共感している。
60.8%
36.3%
2.5%
0.3%
27.高等部は、「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。
28.1%
61.1%
10.0%
0.9%
強くそう思う
どちらかといえばそう思う
あまりそう思わない
まったくそう思わない

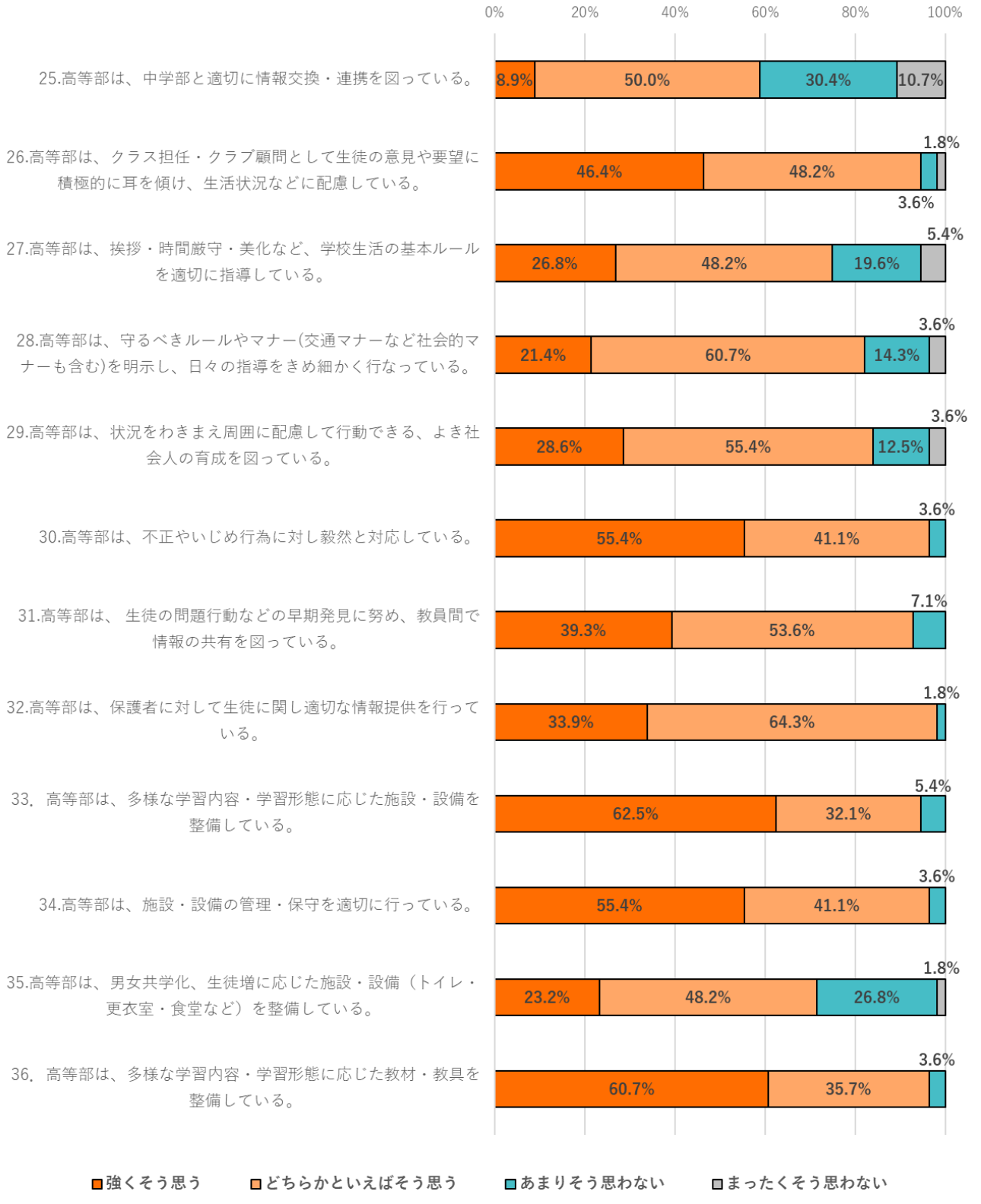
2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100%　回答56人/対象56人）



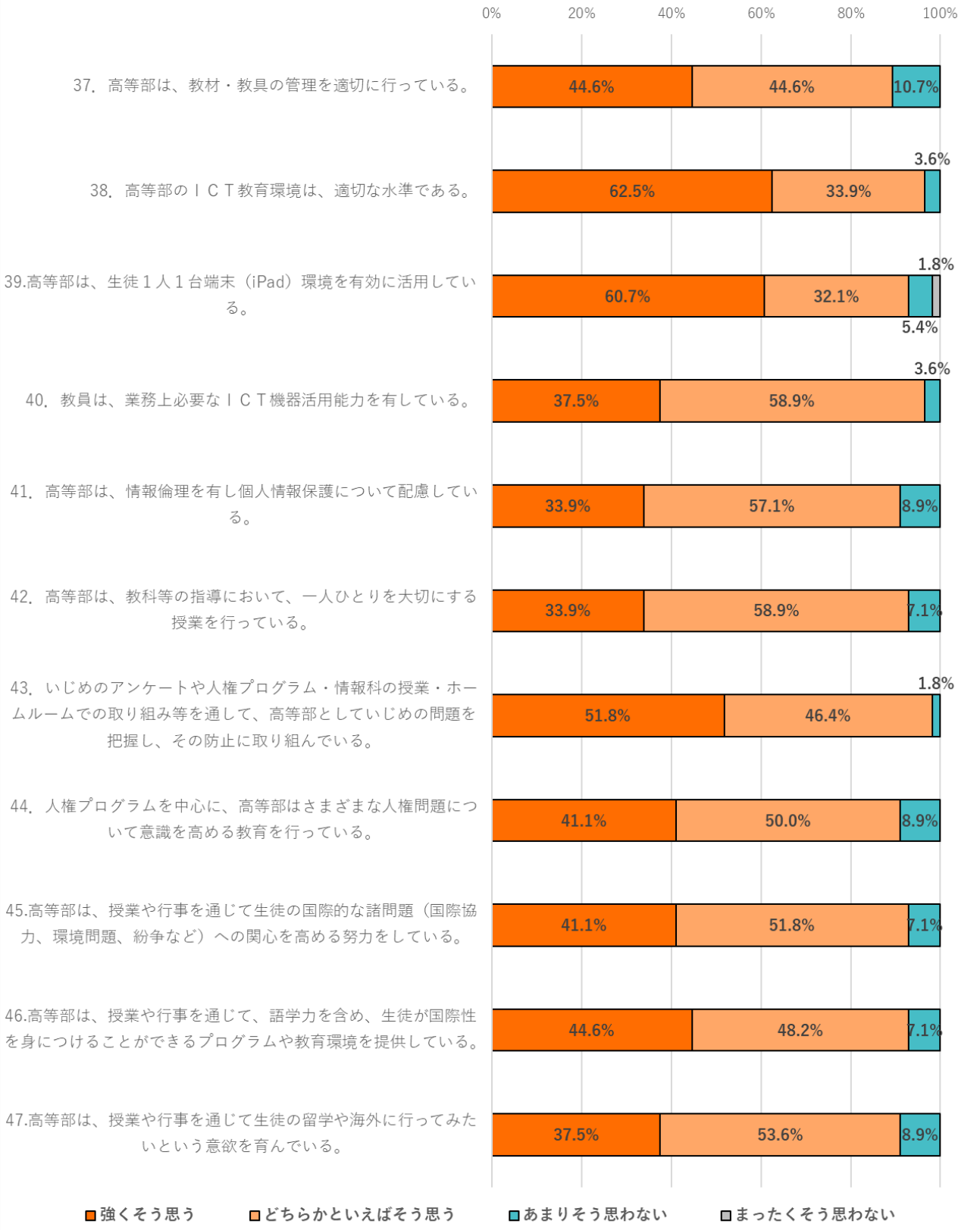
2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100%　回答56人/対象56人）

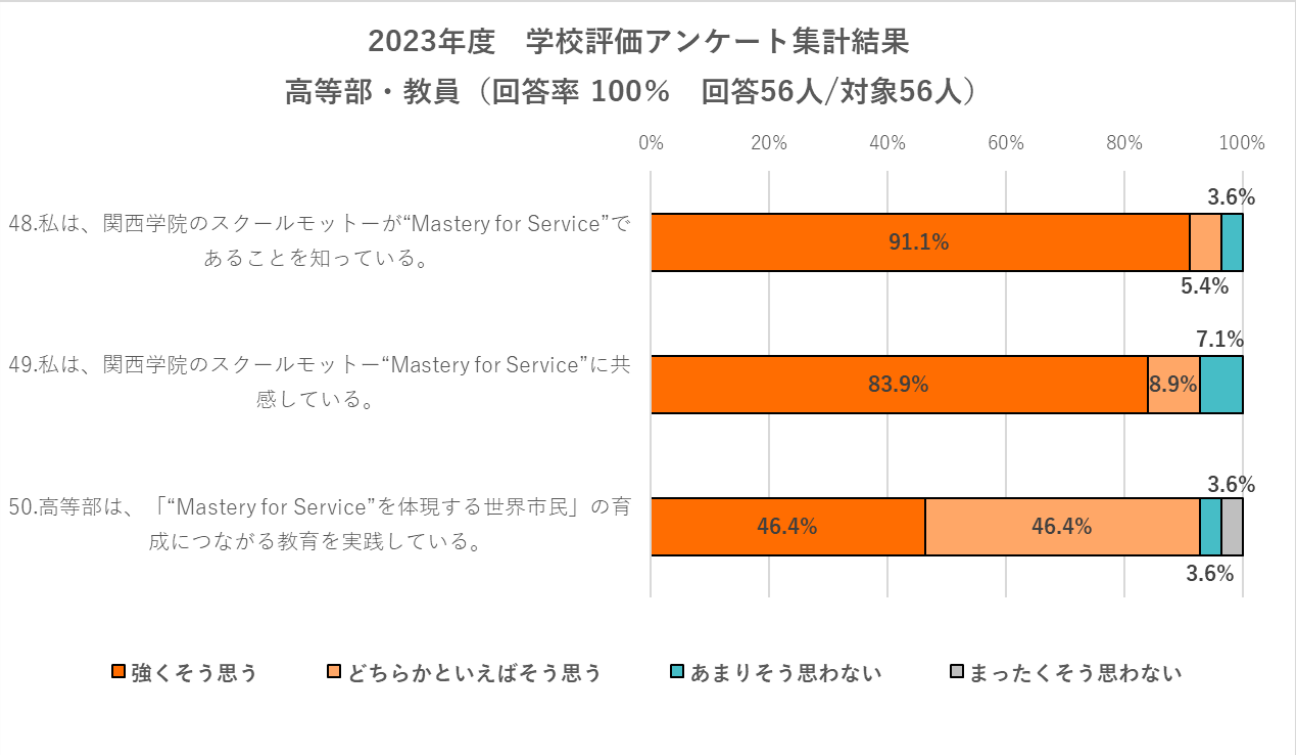


2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100%　回答56人/対象56人）



2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100%　回答56人/対象56人）




2023年度　学校評価アンケート集計結果
高等部・教員（回答率 100%　回答56人/対象56人）
0%
20%
40%
60%
80%
100%
48.私は、関西学院のスクールモットーが“Mastery for Service”であることを知っている。
91.1%
5.4%
3.6%
49.私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に共感している。
83.9%
8.9%
7.1%
50.高等部は、「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。
46.4%
46.4%
3.6%
3.6%
強くそう思う
どちらかといえばそう思う
あまりそう思わない
まったくそう思わない